

現代漢語の語構成について

野村 雅 昭*

〔抄録〕日本語の中には漢語（漢字音から構成される語）が多く用いられる。漢語は造語力、結合力が強く、基本語彙や単位語の設定において問題となる。また字音の種類が少ないため、同音異義語を生じやすい。本稿は、(1)漢語のもつ形態上、意味上の特徴、(2)その結合パターン、(3)意味上の特徴と結合パターンとの関係、を分析しようとする。

まず、漢語の基本単位として意味上の中核をなす語基の概念を立て、それを体言類、相言類、用言類、副言類に分類する。一方、漢語が結合するパターンを三字漢語、四字漢語について分析する。この結合パターンと語基の種類を対照させることによって、長い漢語の中と文構造に近い意味的結合関係を導びく。最後に、それを成分語基の意味的性質から導びくことを試みる。この方法は漢語のみならず、和語、外来語についても適用可能であり、語基の意味的性質や結合パターンについて、テーブルを作成することは言語の自動処理技術において有用である。

1. はじめに

現代日本語でよく使用される単語の分類のしかたの一つに、漢語・和語・外来語というように、単語の出自による分けかたがある。単語の出自とは、その単語が、どのような種類の言語に由来するかということである。和語とは固有の日本語であるものを指し、外来語とは、日本語以外の言語から、輸入・借用したものという。もっとも狭義には、明治以降に日本語化した外来語の多くがヨーロッパ系統の言語、とりわけ現代では、英語（米語）であるところから、アジアや非ヨーロッパ地域の言語を除いていうことも少なくない。

これから問題にしようとする漢語は、古代中国語として渡来したものであるから、外来語の一種であるが、上に述べたような理由によって、別あ

つかいされることが多い。すなわち、別あつかいの理由として、㊦漢語が日本語に入ったのが古く、現代人にとって外来語であるという意識がうすれていることがあげられる。また、それだけでなく、㊧日本語化した漢語が造語単位として機能し、特に明治期以降、多くの語をつくりだしたことも、大きな理由である。漢語を字音語ということもあるのは、㊧の理由を重視した立場である。すなわち今日では、漢語は完全に日本語の一部になっているとみてよい。

日本語の情報処理の発達にともない、日本語のもつ特質が種々の観点から問題になってきた。そのなかで、漢語はつぎのような点で情報処理とかかわりをもっている。

㊦漢語は造語力に富んでいるため、多くの新語をつくりだす。特に専門用語の分野では、そ

*のむら まさあき 筑波大学文芸言語学系講師

の傾向が著しく、使用される語の種類のうちもっとも大きな部分を占める。

②漢語は結合力が豊かで、長い結合形をつくりやすい。そのため、日本文の自動処理における単位分割、情報検索におけるキー・ワードの認定などの際に、単位を設定しにくい。

③少ない種類の字音の組み合わせからなり、漢字で表記されることを前提としているため、漢字を用いない処理では、同音語のあつかに問題が生ずる。

以下に述べることは、主として上記②の特徴と直接にはかかわりをもつ。すなわち、⑦漢語にはどのような形態上・意味上の特徴があるか、④漢語の結合形には、どのようなパターンがみられるか、⑤結合パターンには、単語の意味がどのようなかかわりをもつか、ということ进行分析するのが小論の目的である。

なお以下の記述にあたっては、その大部分を筆者が国立国語研究所在職中に担当した、調査結果の報告¹⁾によっている。統計的な引用のほとんどは、それに基づいている。また用例は、なるべく専門用語をとという編集委員会の要望により、日本科学技術情報センター作成の「キーワード・リスト²⁾」から補充したことを付記する。

2. 漢語語基の性格

2.1 語基の分類

現代語でよく使用される漢語は、「科学」・「技術」・「情報」のように、漢字二字で表記されるものが多い。そのため、これらは二字漢語と呼ばれる。二字漢語を構成している漢字一字で表わされる部分は、本来、一語（一字）で独立した単位として機能することができ、意味との対応も明確であった。しかし現代語では、それぞれが別の単位として意識されることが少なく、全体として一つの概念（意味）と対応するようになっている。たとえば、「科学」の「科」の意味するものを抽象することは不可能であり、「ことなる科に属する植物」のような場合を除けば、単独で使用されることもない。また二字漢語は、形態上も和語や外来語の一単位からなる語と同等の資格をも

つ。

これらの二字漢語に対して、「鉄が酸化する」・「震動を感ずる」、「急に冷却する」の「鉄」・「感」・「急」のように、漢字一字で表わされる単位が存在する。これらは一字漢語と呼ばれ、種類、使用量ともに二字漢語に比べて少ないが、なかには使用度の高いものもある。

この一字漢語は、このように単独で使用されるとはかぎらず、「鉄鉍」、「酸化一鉄」のように、二字漢語の成分となったり、二字漢語と結合して、三字漢語を構成したりする。

またこうした結合成分のなかには、「現一学長」、「同一大学」の「現」・「同」のように、いわゆる連体詞にちかいものや、「化学一的」、「耐熱一性」の「的」、「性」のように、接辞的な機能をもつものも含まれる。

これらの二字漢語や一字漢語は、いわゆる品詞論的には名詞・動詞の語幹・形容動詞の語幹などに分類されるが、必ずしも、その区別は明確でない。たとえば、下記のa・bのそれぞれの文における「健康」という語は、同じ語か異なる語かということが、しばしば問題になる。

a 人間にいちばん必要なのは健康だ。

b 最近の父はまったく健康だ。

そこで、これらを総合していう場合に、「語基」という名称を用いることが便利である。「語基」とは、「語」の意味的な中核をなす部分という程度に解釈してさしつかえない。必要があれば、名詞性語基、動詞性語基というようにいうこともできる。以下では、ここで問題にする二字漢語や一字漢語を、それぞれ複合語基、単純語基のように呼ぶことにする。

2.2 複合語基の分類

複合語基が単独で文中に出現する場合に、どのような形態をとりやすいか、またどのような意味をあらわすかによって、4類に分けることができる。4類とは、A類（体言類）、B類（相言類）C類（用言類）、D類（副言類）をいう。以下にそれぞれに属する語例をあげる。

A類（体言類）

宇宙、人間、船舶、住宅、金属、原子、血液

電気, 海水, 食料, 情報, 言語, 周期, 回路
B類 (相言類)

特殊, 主要, 最大, 高速, 温暖, 柔軟, 水平
垂直, 急性, 簡易, 微少, 有効, 無限, 良質
C類 (用言類)

消費, 収縮, 反射, 溶接, 成長, 転位, 悪化
建築, 生産, 計算, 運動, 集合, 受信, 腐食
D類 (副言類)

全然, 突然, 直接, 一斉, 同時, 絶対, 結局
A類の複合語基は, もっとも種類が多く, 二字漢語の50~55%はこの類で占められる。この類に属する語基の形態的特徴は, 助詞の「ガ」や「ヲ」をともなつて, 文中に自由に出現することである。意味的特徴としては, 具象物である「モノ」, 抽象的概念としての「コト」をあらわす。

B類は, 事物の性質・状態など「サマ」の意味を表わす。この類の語基は, 「～ナ(ノ)」という形態をとつて, A類の語基を修飾する点に特徴がある。種類は少なく5~10%程度にとどまる。

C類は, 「～スル」という形態をとつて, 「～スルコト」という動作性の概念を有する。ただし, この類に属する語基のほとんどは, A類とおなじく, 「ガ」や「ヲ」をともなうこともできる。種類はA類について多く, 30~35%を占める。

D類は単独で, あるいは「～ニ」という形態で文中に出現し, 述語の修飾部分となりうる。この類に属するものは少なく, 他の語基と結合することもあまりない。

単独で文中に出現する複合語基は, このようにしていずれかの類に所属させることができるが, さきの「健康」のように, 二つ以上の類の用法をかねそなえるものもある。A類の用法をもつC類のほかに, A類とB類にまたがるものには, 「安全・異常・自由・経済・名誉」などがある。さらには, ABCの3類にまたがる「満足・反対・心配」のような語基もある。

上にあげた複合語基は, いずれも単独で文中に出現することができるし, 他の語基や接辞と結合することもできる。しかし, 複合語基のなかには単独で出現することができず, 他の語基や接辞と結合する用法しかもたない, いわば結合専用語基

ともいふべきものが存在する。たとえば, 「国際」という語基は「～会議・～情勢・～的・～性」のように, 結合形の部分としては出現するが, 単独で出現することはない。使用回数の多いものには「積極・具体・本格・自主・耐久」などといった例があげられる。こうした結合専用語基には, 使用回数の多いものは少ないが, 種類としては複合語基全体の5~10%程度を占める。これらは, 形態上からはA~D類のどれに属するかを決定することはできないが, 意味上はどれかの類に属させることができる。

特に専門用語には, 単独の二字漢語としては慣用が熟さないが, 結合専用形式としては, かなり安定度の高いものがすくなく存在する。たとえば次のようなものである。

A'類…被子(～植物)・産学(～協同)・双胴(～船)・微粉(～炭)・電磁(～偏向)
B'類…平滑(～筋)・赤外(～線)・可採(～鉱量)・難融(～金属)・恒等(～式)
C'類…共産(～主義)・抗生(～物質)・顕微(～鏡)・遠隔(～制御)・電離(～層)

これらは, 結合形の前部分に出現するものがほとんどで, 後部分として出現することは少ない。したがってA'類やC'類に属するものでも, B'類的な性格をも濃くそなえている。またA'類には, 省略形とみられるものが多数ふくまれる。

2.3 単純語基の分類

複合語基の多くが自立性を有しているのに対して, 単純語基では自立性のものは少なく, 形態上は接辞とまぎらわしいものがかなり存在する。(接辞とは, それ自身で自立することができず, 語基と結合して形式的な意味を表わすものをいう。)

ただし, ここでは, 語基と接辞の区別には深入りせず, 語または語基の一次結合形と結合する単純語基について説明をくわえる。また単純語基には, 主として語の前部分に出現するものと後部分に出現するものとがあるが, それについても詳述することはさしひかえる。

複合語基の4分類にならって, 単純語基を分類すると, 次のようになる。単純語基の場合は,

小文字の a ～ d で表わすことにする。

a 類 (体言類)

核 (～分裂), 法 (～改正), 脳 (～軟化)
光 (～速度), 図 (心電～), 線 (導火～)
剤 (造血～), 計 (高度～), 炉 (原子～)
物 (化合～), 圈 (成層～), 権 (著作～)
帯 (造山～), 品 (規格～), 時 (標準～)

b 類 (相言類)

逆 (～断層), 急 (～傾斜), 新 (～幹線)
高 (～周波), 柔 (～構造), 軽 (～金属)
多 (～目的), 大 (～口径), 低 (～気圧)

c 類 (用言類)

反 (～磁性), 脱 (～酸素), 省 (～資源)
過 (～酸化), 抗 (～代謝), 誤 (～操作)
準 (～平原) / 視 (重大～), 産 (近海～)

d 類 (副言類)

再 (～構成), 最 (～高速), 極 (～低温)

結合形として出現する単純語基の大部分は, a 類に属する。そのほかでは, b 類がやや多く, c 類は少ない。d 類になると, きわめて少数である。体語類への集中の度合いが強いこと, および用言類が少ないことの二点で, 複合語基の場合とは, 異なる分布を示している。

a 類に属するもののうち, 前部分に出現するのは種類が少なく, 自立性の強いものが多い。また次のような語基は, 体言性であるが, 修飾機能がつよく, 連体詞的に使用される。

全 (～地域), 各 (～企業), 前 (～会長)
総 (～需要), 両 (～陣営), 諸 (～元素)

後部分に出現する a 類のなかには, 特定の語と結合しやすい, 接辞性の語基が存在する。特に, 数詞と結合するものは種類が多い。

年 (〇〇～), 円 (〇〇～), 度 (〇〇～)
点 (〇〇～), 本 (〇〇～), 歳 (〇〇～)

また, c 類のなかの「反」, 「過」, 「準」などは動作性を失ない, 接頭辞化しているとみることでもある。

このような単純語基のなかで, 語構成上, 特徴的な用法をもつものとして, 次の二つのグループをあげることができる。一つは前部分に出現する「無・不・非」など否定の意味をそえるもので, もう一つは後部分にあらわれる「的・性・化」な

どのグループである。これらは表わす意味が形式的ないし抽象的であり, 結合形全体の性質を決定する機能をもち, 接辞的性格のつよいものである。

「無・不・非」は, 結合形全体を相言性の語基相当の単位に変換する。結合対象となる語基の性格などはそれぞれ異なるが, それについては詳述した文献³⁾があるので, 参照されたい。

無 (～重力, ～秩序, ～制限, ～関係)

不 (～安定, ～連続, ～必要, ～完全)

非 (～公式, ～合法, ～課税, ～能率)

後者のうち, 「的」は結合形全体を相言性に, 「性」は体言性・相言性に, 「化」は用言性に変換する。次のような例である。

的 (有機～, 局地～, 物理～, 人工～)

性 (自主～, 放射～, 免疫～, 火山～)

化 (合理～, 工業～, 自由～, 液体～)

3. 語基の結合パターン

3.1 語基の結合の認定

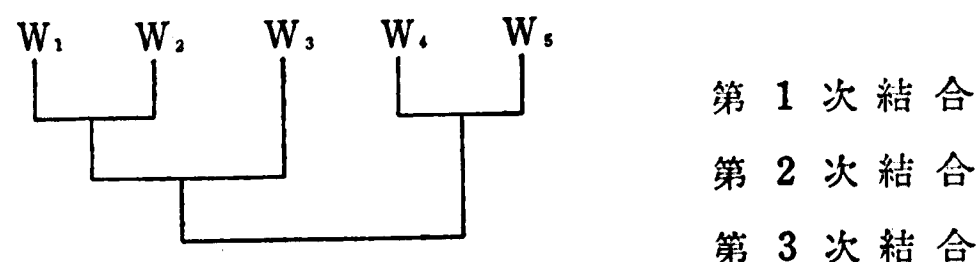
漢語の特徴の一つとして, 結合力の強さをあげることができる。最近のニュースにしばしばあらわれる「公共企業体等関係閣僚協議会専門委員懇談会」という長い名称の組織は, なんと20字からなっている。このような長い結合体でも, なんとか理解できるのは, それが短かい単位の結合の集積であるからにはほかならない。その短かい単位とは, 複合語基および単純語基である。つまり, 漢語の結合形は, ほとんどが複合語基と単純語基との結合パターンに還元することができるのである。

いま, 単純語基を「w」という記号であらわすことにし, n 個の単純語基からなる結合形 P(n) を, 次のような一般式であらわすことにする。

$$P(n) = w_1 + w_2 + w_3 + \dots + w_{n-1} + w_n$$

このように考えると, n 個の単純語基からなる語は, 一般に (n-1) 回の結合をし, 最大で (n-1) 次の結合をすることができる。たとえば, 「情報化社会」という結合形の構造は, 第1図のように示される。

この「情報化社会」のような構造をもった語を



第 1 図 語基の結合パターンの認定

図によらずに、一般式で表わすならば、次のようになる。

$$P(5) = \{(w_1 + w_2) + w_3\} + (w_4 + w_5)$$

同様にして、比較的少数の語基からなる結合形であれば、いずれも一般式で表わすことができる。

$$P(4) = \{w_1 + (w_2 + w_3)\} + w_4$$

：不規則波

$$P(5) = \{(w_1 + w_2) + (w_3 + w_4)\} + w_5$$

：付加価値税

$$P(6) = \{w_1 + (w_2 + w_3)\} + \{(w_4 + w_5) + w_6\}$$

：多目的貨物船

この一般式の w を u に、 $(w + w)$ を U とおきかえれば、それぞれは単純語基と複合語基の組み合わせとして、さらに簡単になる。

$$P(4) = (u + U) + u : \text{不規則波}$$

$$P(5) = (U + U) + u : \text{付加価値税}$$

$$P(6) = (u + U) + (U + u) : \text{多目的貨物船}$$

以下では、三字漢語と四字漢語の結合パターンをこのような方法で分類するが、それより多数の語基からなる結合形の部分パターンは、いずれもそのなかに含まれることになるはずである。

3.2 三字漢語の結合パターン

三字漢語の構造は、二種類のパターンに大別することができる。

$$\text{I 型 } (U + u) \cdots \{(O + O) + O\}$$

：呼吸器，整数論，培養基，狭心症，球面鏡

$$\text{II 型 } (u + U) \cdots \{O + (O + O)\}$$

：性細胞，定電圧，生化学，軽車両，陽電子

$(U + u)$ 型と $(u + U)$ 型では、約 4.8 対 1 の比で、前者のほうが出現率が高い。その理由は、単純語基のうち、a 類のものに $(u + U)$ の u にな

りうるものがきわめて少ないことによる。

このほかに、三字漢語には「市町村」のような $(u + u + u)$ 型、「入出力」のような $(u \cdot u) + u$ 型などが存在するが、出現率はきわめて低い。

3.3 四字漢語の結合パターン

四字漢語の結合パターンのうち、出現率の高いものは、次のように分類される。

$$\text{I 型 } (U + U) \cdots \{(O + O) + (O + O)\}$$

：周辺装置，節足動物，航空写真，分布関数

$$\text{II}_1 \text{ 型 } \{(U + u) + u\} \cdots \{(O + O) + O\} + O$$

：対流圏外，耐熱用鋼

$$\text{II}_2 \text{ 型 } \{(u + U) + u\} \cdots \{O + (O + O)\} + O$$

：微生物学，不飽和土

$$\text{III}_1 \text{ 型 } \{u + (U + u)\} \cdots O + \{(O + O) + O\}$$

：非対象性，脳下垂体

$$\text{III}_2 \text{ 型 } \{u + (u + U)\} \cdots O + \{O + (O + O)\}$$

：超遠距離，新鉄合金

I 型は 90% 以上をしめる。II 型は合わせて 5% 程度，III 型は 3% 未満である。このほかに、「農畜産品」のような $\{(u \cdot u) + u\} + u$ 型、「都道府県」のような $(u + u + u + u)$ 型などがあるが、合わせても 1% にみえない。

つまり四字漢語では、 $(U + U)$ の I 型が圧倒的に多く、三字漢語の前後に単純語基が接続した II 型や III 型は出現しにくい。このことは、三字漢語が結合形の部分パターンとして出現しにくいことを示すデータのようなものである。しかし、五字漢語では、三字漢語の前後に二字漢語が接続する例が多数みられるので、単純語基が長い結合形とは接続しにくいことを物語るものと、みるほうがあたっているであろう。

4. 語基の結合法則

4.1 語基の意味的結合

三字漢語や四字漢語の構造を以上のようなものと考え、それを語基の種類と対照させることによって意味的な結合関係をとらえることが可能になる。三字漢語および四字漢語で出現確率の高い、 $(U + u)$ 、 $(u + U)$ 、 $(U + U)$ の三つのパター

ンについて、それぞれの語基の性格によって結合関係を分類したのが、以下の〔第1類〕から〔第5類〕までのタイプである。なお、ここには、出現数の少ないものは除いてある。

〔第1類〕

(1) $\langle A \rangle + \langle B \rangle$

$\langle A \rangle$ が $\langle B \rangle$ ノ状態デアル

物資—不足・胃酸—過多・精神—異常

(2) $\langle A \rangle + \langle C \rangle$

$\langle A \rangle$ が $\langle C \rangle$ スル ガコガ・ヲ・ニ・デ…

地盤—陸起・動脈—硬化／地震—予知・原価—計算／内政—干涉・設備—投資／空中—散布・月面—着陸／地熱—発電・薬物—中毒

〔第2類〕

(1) $\langle B \rangle + \langle C \rangle$ $\langle b \rangle + \langle c \rangle$

$\langle B \rangle$ ノ状態デ $\langle C \rangle$ スル

低圧—発電・完全—消毒・特殊—圧延
逆—浸透・急—上昇・偏—微分

(2) $\langle C \rangle + \langle C \rangle$

$\langle C \rangle$ ノ状態デ $\langle C \rangle$ スル

徹夜—観測・接触—分解・搬送—伝送

(3) $\langle D \rangle + \langle C \rangle$

$\langle D \rangle$ ノ状態デ $\langle C \rangle$ スル

逐次—制御・突然—変異・即時—停止

〔第3類〕

(1) $\langle B \rangle + \langle A \rangle$ $\langle B \rangle + \langle a \rangle$

$\langle b \rangle + \langle A \rangle$

$\langle B \rangle$ ノ状態デアル $\langle A \rangle$

温暖—前線・微細—繊維・等価—回路
高圧—管・定常—波・特殊—鋼・環状—板
大—動脈・多—結晶・重—陽子・柔—構造

(2) $\langle C \rangle + \langle A \rangle$ $\langle C \rangle + \langle a \rangle$

$\langle C \rangle$ スル $\langle A \rangle$

合成—肥料・通風—装置・酸化—塩素
脱色—剤・冷却—水・計測—器・致死—量

〔第4類〕

(1) $\langle A \rangle + \langle A \rangle$ $\langle A \rangle + \langle a \rangle$

$\langle a \rangle + \langle A \rangle$

鉄道—貨物・太陽—電池・土壌—温度
地下一室・宇宙—線・酢酸—塩・動脈—圧
生—化学・核—燃料・地—磁気・面—光源

〔第5類〕

(1) $\langle A \rangle \cdot \langle A \rangle$

鉄骨—鉄筋・学術—文化・鉄道—船舶

(2) $\langle B \rangle \cdot \langle B \rangle$

高温—高圧・不要—不急・自由—自在

(3) $\langle C \rangle \cdot \langle C \rangle$

酸化—還元・消化—吸収・耐震—耐熱

以上のうち、もっとも出現数が多いのは〔第4類〕である。ついで〔第2類〕が多く、〔第1類〕・〔第3類〕がそれにつづく。〔第5類〕は少なく、特に専門用語ではあまりみられない。

〔第1類〕～〔第3類〕は、文の成分の相互関係と類似の関係が語基どうしの間にもみられるもので、〔第1類〕は主述関係、〔第2類〕は連用修飾関係、〔第3類〕は連体修飾関係に相当する。〔第2類〕の $\langle A \rangle + \langle C \rangle$ には、狭義の格関係のほか、いろいろなタイプが存在する。〔第4類〕には種々の関係がみられるが、すべてをあげられないので省略にしたがった。〔第5類〕はいわゆる並列の関係である。

4.2 基底構造における意味的結合

上にみたように、語基と語基の結合関係には文の成分相互にみられるような関係が存在する。しかし、それをさらに深くとらえるためには、語基の意味的性質そのものを対象にする必要がある。ここでは、上記のタイプのうち、二、三のものについて分析を試みることにする。

$\langle A \rangle + \langle A \rangle$ のタイプに属するものは、もっとも種類が多く、いわゆる名詞どうしの結合に相当し、結合関係が表面にあらわれていないため、分析しにくい。しかし語基の意味を指標とすることによって、次のような記述が可能である。たとえば、前部分の語基 $\langle P \rangle$ が \langle 場所 \rangle をあらわし、後部分の語基 $\langle Q \rangle$ に種々の語基が結合する場合、次のような構造として、とらえることができる。

$\langle Q \rangle$ が $\langle P \rangle$ デ(ニ) √スルソノ $\langle Q \rangle$

例① $Q_1 = \langle$ 物 \rangle

$\langle Q_1 \rangle$ が $\langle P \rangle =$ 存在スルソノ $\langle Q_1 \rangle$

山岳—土壌・熱帯—植物・火山—岩・地下一
水

例② $Q_2 = \langle$ 現象 \rangle

<Q₂>が<P>で生起スルソノ<Q₂>

海底—地震・都市—公害・坑内—火災・高山—病

ところで、<P>が<場所>、<Q>が<物>であっても、かならずしも、上記①のように記述できるとはかぎらない。たとえば次のような関係もありうる。

Xが<P>で<Q>ヲ使用スルソノ<Q>

鉱山—機械・宇宙—服・雪上—車・水中—翼

この場合、<Q>を使用する主体は、ここには明示されていないXであり、上記①で、<Q>が主体として記述されるのとは構造を異にする。つまり、みかけの構造はおなじでも、基底となる構造は異なっているわけである。

このような基底構造を記述するためのサンプルとして、前掲〔第3類〕の<C>+<A>タイプをとりあげてみよう。このタイプのみかけの構造は用言性語基が体言性語基を修飾するものであるが、基底構造は次のように記述される。

I. Xが<C>スル<A>

[X=<A>]

①<A>が<C>スルソノ<A>

酸化—炭素・沈降—海岸・発光—塗料

[X≠<A>]

②Xが<A>で<C>スルソノ<A>

<A>=<場所> デコデ・ニ・カラ・ヲ

群生—地区・着水—場所・通勤—圏

③Xが<A>ニ<C>スルソノ<A>

<A>=<時>

潜伏—期間・反応—時間・繁殖—年代

④Xが<A>ヲツカッテ<C>スルソノ<A>

<A>=<物>

暖房—器具・加速—器・脱臭—剤

⑤Xが<A>で<C>スルソノ<A>

<A>≠<物>

自衛—本能・降下—技術・経営—理論

⑥Xが<C>スルトコロノ<A>

発振—現象・衝突—効果・爆発—災害

II. XがYヲ<C>スル<A>

[Y=<A>]

①Xが<A>ヲ<C>スルソノ<A>

= (<X>ニ) <C>サレタ<A>

消費—電力・合成—洗剤・開拓—地

[X=<A>]

②<A>がYヲ<C>スルソノ<A>

<A>=<人間・組織>

選定—委員・搜索—隊・管理—人

[X≠<A>, Y≠<A>]

③Xが<A>でYヲ<C>スルソノ<A>

<A>=<場所>

保管—倉庫・採掘—斜面・輸送—基地

④Xが<A>ニYヲ<C>スルソノ<A>

<A>=<時>

決算—期日・猶予—期間・実施—段階

⑤Xが<A>ヲツカッテYヲ<C>スルソノ<A>

<A>

<A>=<物>

消化—酵素・記録—装置・接着—剤

⑥Xが<A>でYヲ<C>スルソノ<A>

<A>≠<物>

培養—条件・検討—材料・解決—手段

⑦XがYヲ<C>スルトコロノ<A>

観測—資料・抄録—作業・探索—問題

このほかにも、III—XがYニ<C>スル<A>、IV—XがYヲZト<C>スル<A>のような基本タイプが存在するが、専門用語ではそれほど多くないので省略する。たとえば「通信—衛星」はIV型に属し、「Xが<A>ヲツカッテZト<C>スルソノ<A>」のように記述される。

このように、<C>+<A>タイプについて分析してみると、連体修飾関係の被修飾語である<A>は、基底構造の文中における成分となる場合と、そうでない場合があることがわかる。後者の場合に相当するのが、I—⑥、II—⑦である。また前者の場合でも、<A>が不可欠な成分の場合とそうでない場合とに二分される。不可欠な場合とは、I—①、II—①、II—②である。

このような事実は、結合形を構成している語基相互のみかけの構造を語基の形態上・意味上の特徴から分類して、基底となる文構造に還元することによってえられる。上に述べたのはその一端にすぎないが、このような方法で漢語の結合形について、記述をすすめることが必要かと思われる。

5. おわりに

以上に述べたことを言語情報処理の立場から整理してみよう。複雑な漢語の結合形を解析するためには、基本的なパターンを用意しておくことによって、効果的な手順で、正しい解がえられるようになるだろう。たとえば漢字連続の第一次解析手順として、第一字目から二字ずつに区切ることが効果的であることは、経験的に確かめられているが、それを修正する場合に、このようなパターンを適用することが考えられる。

また、その際には、記憶装置内の辞書にそれぞれの専門分野で使用度の高い複合語基（単純語基も）と、接辞的に多用される単純語基（「不」・「非」・「的」・「化」など）とが登録されていなければならない。そして、その辞書には、上に述べたような形態上・意味上の特徴が記載されていることが望ましい。

さらに、このような方法は漢語にかぎらず、和

語、外来語にも適用できるはずである。その場合には、ここに述べたよりも、もっと多種の情報が必要となろうが、基本的には、このような特徴が記載されるべきであろう。

参考文献

- 1) 野村雅昭：複次結合語の構造 国立国語研究報告 49, 電子計算機による国語研究 V 72—93 ('73)
同 上：三字漢語の構造 国立国語研究所報告 51, 電子計算機による国語研究 VI 37—62 ('74)
同 上
：四字漢語の構造 国立国語研究所 54, 電子計算機による国語研究 VII 36—80 ('75)
- 2) 日本科学技術情報センター編：キーワードリスト（全分野）——JICST 科学技術用語 シソーラス 1975年版——1975
- 3) 野村雅昭：否定の接頭語「無・不・未・非」の用法 国立国語研究所論集 4・ことばの研究 31—50 ('73)

調査サービス

●製品企画・研究開発の面では

プロジェクトやテーマの決定
最新の動向の追跡
競合製品や競争相手の動き

このように日常の企業活動に調査は欠くことができません。JICST の調査サービスは、科学技術の各分野の熟練した専門家と、内外の主要な二次資料（約 200種）によって、ご注文の主題に関するあらゆる「情報」をもれなく、正確に調査いたします。

また、調査はたのみたいが、企業秘密が他にもれるのでは？ という心配もありません。JICST は、調査業務を進めるうえでとくに秘密が守られるように配慮し、万全の態勢をとっています。

（なお、この他電子計算機を使った SDI サービスも行なっておりますので、あわせてお問い合わせください。）

——調査申込、料金、納期については下記へ——



特殊
法人

日本科学技術情報センター

本 部	〒100 東京都千代田区永田町二丁目 5-2	☎ (03) 581-6411
大阪支所	〒550 大阪市西区ウツボ 1-118	☎ (06) 443-6521
名古屋支所	〒460 名古屋市中区栄二丁目 10-19	☎ (052) 221-8951
九州支所	〒805 北九州市八幡東区大蔵 1-13-3	☎ (093) 651-2455
中国支所	〒730 広島市基町 5-44	☎ (0822) 28-5991

●特許戦略の面では

特許出願のときの公知資料の調査
異議申立のための証明資料の調査
無効審判のための証明資料の調査